

# 「夏・草いきれの季節」

文と写真／敷田麻実（野生生物保護学会会長）



北海道の夏は短い。五月頃から長くさわやかな季節が続くので、梅雨空を抜ける解放感はない。それでも地域に足を運ぶと、収穫期のトウキビの葉には陽射しが輝き、夕暮れの残照も息を呑むほど美しい。

他の季節に比べて、夏の思い出には郷愁が重なることが多い。映画「少年時代」を見て、つんとする懐かしさにとらわれるのは私だけではないだろう。夏の陽射しを受けながら遠く見上げる入道雲、踏み込んだ草むらのむせかえるような草いきれ、縁側で聞くヒグラシの声。夏は人を少年時代に引き戻す。

しかし、大都市生まれ、大都市育ちの割合が主流となりつつある現在、彼らの夏の記憶は過去のそれではない。青々とした草むらなど身近になく、夏休みの思い出は、エアコンの効いた薄暗いゲームセンターだろう。

そう、彼らの時代には、自然体験の共有を暗黙の了解にしたアプローチは通用しない。自然環境と人の「新たな関係性づくり」を試みる必要がある。主流派の彼らの支持を得る新たな仕掛けを考えることが、今後のテーマとなるだろう。

